

『ヴェニスの商人』における贈与の構造

内 藤 亮 一

『ヴェニスの商人』(*The Merchant of Venice*)⁽¹⁾において、アントーニオ (Antonio) とシャイロック (Shylock) という二人の人物は特に孤立した存在である。シャイロックがヴェニスの共同体から排除されることにも問題があるが、五幕におけるアントーニオの位置には、さらに釈然としないものがある。彼は大団円における結婚のよろこびの輪から、少なからず排除されている。⁽²⁾ 慈悲と司法、友愛と結婚愛といった対立の網目の中で、彼らはいかにして排除されていくのか。

この排除の仕組みを、二種の交換形式である「贈与」と「交易」という観点から、劇中の交換及び取引を分析することで明らかにしてみたい。主にシャイロックとアントーニオの間の契約、箱選びから婚姻に至るポーシア (Portia) とバッサーニオ (Bassanio) の関係、指輪騒動が両者とアントーニオを巻き込む関係を取り上げて考察する。

本論にはいる前に「贈与」と「交易」という概念及び、それに関連する二種類の間関係の在り方を、規定しておきたい。⁽³⁾

交易においては、当事者は相互に対等であり、当事者間の社会的関係は弱く、交易終了と共に、両者の関係は終わり、友情や、敵対関係が生まれることはない。交易の目当ては相手の品物であり、損得が計りにかけられる。また交易は「契約」という形で「法」により保護されている。つまり、交易とは等価交換であり、人間関係を作らない。

一方、贈与においては、当事者は必ずしも対等ではなく、当事者間の社会的

関係は強く、贈与によってより強められる。贈与の目当ては相手の人間であり、贈り物の授受は義務づけられており、互酬的ではあるが、均衡が取れているとは限らない。また贈与は「法」の保護を受けない。つまり、贈与とは、非等価交換であり、人間関係を作り出す。

以上の点をふまえて『ヴェニスの商人』をみると、この本来異なる性格を持つ二つの交換形態を、登場人物が混同していたり、意識の上になぜがあるために様々な問題が引き起こされることがわかる。まずヴェニスにおける、シャイロック、バッサーニオ、アントーニオの間の金銭授受の関係を取り上げることにする。

バッサーニオの金銭借用の申し出を、シャイロックは最初、取引、交易のつもりで受けとめている。そのことはアントーニオが来る前の、バッサーニオとの会話の中に現われている。シャイロックはアントーニオの財産が海にあること、したがって保証に危険があることなど、条件が損得の勘定に合うかどうかを慎重に検討している。

一方、バッサーニオには、取引であるにもかかわらず、人間関係を重視した、むしろ、贈与の特徴といえる考え方がみられる。例えば“good man”という言葉の解釈の違い。シャイロックはアントーニオの保証人としての能力を念頭において、“good man”（1. 3. 12）という。それをバッサーニオは、人間的に良いという意味にすぐ取り違えてしまう（1. 3. 13-14）。バッサーニオは人間同士の絆を第一に考えていることが露呈され、物の交換と人間の絆とは別のものだという「交易」の論理とは、無縁の人物であることが示される。もう一つは、シャイロックを食事に誘う点である。取引の件について、条件等を確かめるため、シャイロックがアントーニオと話したいと言うと、バッサーニオは一緒に食事をしようと誘う（1. 3. 32）。ここでもバッサーニオは取引の本質を理解していない。食事という人間関係を作る行為は、取引とは無関係である。シャイロックは無論これを断る。シャイロックはここで、招待というバッサーニオの贈与行為を断るのである。この場を通して明らかにされるのは、バッサーニオは交易よりも贈与の社会に生きているということである。

そこにアントーニオがやって来る。アントーニオは、金が目当てであり、シ

シャイロックという人間には関心がない。アントーニオにとって、交易の相手と贈与の相手は区別されている。⁽⁴⁾一方シャイロックは、最初の傍白でも明らかのように、純粋な商取引としてより、アントーニオという人物の方により関心が向かう（1. 3. 41-52）。

商品よりその授受者である人間の方に関心が移るということ、それは「交易」から「贈与」へ変わるということである。それゆえにシャイロックは、アントーニオの「交易」としての申し出に対して、「贈与」として金を贈ることを申し出るのである（1. 3. 138-42）。友人ではなく敵と思って金を貸せというアントーニオに対して、友人になろうというのだとシャイロックは答える。シャイロックのこの行為は証文を取るとはいえ、肉一ポンドと三千ダカットが不釣り合いであれば余計、純粋な交易というより贈与行為にちかい。贈与と交易という分けてしかるべきものを、シャイロックは混同するのである。

しかし贈与は両者を親密にすると同時に、両者に敵対関係を作ることもある。“gift”の語源を辿れば、同根の古ドイツ語“gift”、中オランダ語“gift, gif”においては「贈り物」と同時に、「毒」の意味にもなる。⁽⁵⁾少なくともバッサーニオはこの贈与の持つ二面性を感じている。“I like not fair terms and a villain's mind”（1. 3. 179）。

一方アントーニオは、自分の船のことを信頼しており、返済のことを念頭に入れている点において、シャイロックの行為を贈与と受けとめておらず、「交易」として受けとめている。シャイロックが親切になったという彼のせりふは軽口に過ぎず、シャイロックを見直したことは強調されていない。シャイロックほど、アントーニオの方は贈与によって作られる絆を感じてはいない。つまり、この金銭授受に関して、アントーニオとシャイロックには互いに意識の上で、贈与と交易の擦れ違いがあるといえる。

このアントーニオとシャイロックの関係は、ジェシカ（Jessica）の逃亡によってシャイロックの怒りが爆発することで、本来孕んでいた歪みを露呈する。アントーニオの船の難破を知らされ、シャイロックは復讐を誓う。彼は“merchandise”（3. 1. 128）という表現を用い、取引上の問題を盾に取るが、実際には、契約の破約に腹を立てているのではない。契約を守るとは言っ

ても、その動機は個人的な恨みであり、感情のはいる余地のない交易の論理よりは、贈与の論理に基づいている。今ではアントーニオに贈った三千ダカットは、以前のアントーニオからの負の贈与（犬呼ばわりしたり、唾を吐きかけたこと）に対する、お返しの意味を持っている。元来交易の相手と贈与の相手とは、別集団でなければならない。アントーニオのそもそもの間違いは、既に負の贈与関係にある相手と交易を行なったことである。

シャイロックが交易の論理に従っているというのは正しくない。彼は交易の論理、つまりヴェニス論理の代表者ではなくて、単なる復讐者である。しかし問題は彼の復讐が、交易の形をとるところにある。交易は法の保護を受ける。よって彼は法の保護のもとに、法が保証していない、むしろ禁じている復讐を果たすことになる。

シャイロックが裁判で敗れるのは、シャイロックの狙いが法で保護される交易の論理に基づくものでない以上、当然のこととも言える。シャイロックが法に訴えるかぎり、彼は交易の論理に従うことになり、その時、交易の論理の帰結は、アントーニオの命ではなく、証文通りの物と物としての、三千ダカットの金と肉一ポンドの厳密な交換である。法が保護するのは交易の論理であり、それはシャイロックの思惑を越えたところにある。交易に際しては、慈悲も復讐も問題にならない。シャイロックは、贈与の論理と交易の論理を混同させたがために、自滅したのである。

シャイロックの示しているものが、負の贈与のもたらす敵対した人間関係だとすれば、ポーシアは、慈悲という正の贈与を示す。裁判の場で、法、交易を体現する前に、ポーシアは“mercy”を説く。ここに現われているのは与えるもの、受け取るものの両者を祝福する贈与の精神そのものであるといえよう。“mercy”の語源が“mercēs”（報酬）であり、それは天における恵みであると同時に、さらに語源を辿れば、“merx”（商品）ということであり、“merchant”の語源にもなるということは、商人と贈与の精神がこの劇のどこかで繋がっていることを暗示している。

ヤコブ（Jacob）とラバン（Laban）の挿話で、シャイロックが利子を取ることを弁護するのに対し、アントーニオは、ヤコブを冒険商人に例え、その利益

を神の贈り物と見ている。

This was a venture, sir, that Jacob serv'd for,
A thing not in his power to bring to pass,
But sway'd and fashion'd by the hand of heaven.

(1. 3. 91-93)

ヤコブの行為はアントーニオから見れば、確実な見返りのあるものではない。そして見返りが確実でなく、それが相手の意思に任されているという点で、これは「贈与交換」と同じシステムによっている。そしてこの見返りが確実でなく、神の意思によるというのはアントーニオの商売である遠隔地交易にも当て嵌まることである。⁽⁶⁾

そもそも交易で稼いでいるはずのアントーニオが、報酬は神の贈り物と見做しているとすれば、ヴェニス自体が、交易都市といっても、贈与の精神の強い都市ということになる。シャイロックがこの町で贈与と商いの精神を象徴する“mercy”を否定すれば、その結果は明らかである。

ヴェニスにおいて、交易はこのように贈与と不可分なかたちで現れている。その都市で、交易の論理だけを振りかざすシャイロックを退け、贈与と交易の調和をヴェニスに取り戻すのは、ベルモント (Belmont) から来たポーシアである。ではこのポーシアとベルモントを支配しているのは何なのか。この点を確認するために、まずポーシアとバッサーニオの周辺から見ていくことにしよう。

贈与が巡らす網目の中でポーシアがいかなる存在であるかといえば、婚姻前のポーシアは、ポーシアの父親からの求婚者への贈り物である。箱選びは、求婚者が贈与と交易のどちらの精神の持ち主かを計る試金石になっている。

モロッコ王 (The Prince of Morocco) とアラゴン王 (The Prince of Arragon) は自分とポーシアの釣り合いばかりを考え、求婚を交易としか考えない。モロッコ王が盲目の運命によって左右されることに不平をいうのも、彼が交易をするつもりで来たことを示す。⁽⁷⁾このように交易としてポーシアとの

結婚を考える者にとっては、ポーシアは品物であり、手に入れば、父親との関係も終わりになる。

それに対してバッサーニオは、自分に出された条件とポーシアの価値を比較することなく、冒険商人よろしく神の与える運命に進んで身を任す。これは、バッサーニオが贈与の精神に組していることを示す。贈与においては、釣り合いを考える余地なく受け取る義務がある。ならばポーシアを得るものは、贈与の精神を理確するバッサーニオである。

別の説明をすれば、箱選びの場面で求婚者は彼女の亡き父親と交渉をしているといえる。この交渉における父親の条件は、求婚に失敗したら独身を通すということである。当時の婚姻とは、一方で父親からの贈与的性格を持っているとはいえ、持参金等が見合うかどうかを吟味し、検討する点においては、むしろ交易の性格に近い面を持っている。その点からいえば、このポーシアの父親の示す条件は交易と呼ぶには不合理に過ぎる。父親の真意は、婚姻の贈与的性格を強めることで、ポーシアの家との結び付きを強め、家系を絶やさないことにある。ベルモントは贈与の論理が交易の論理を覆っている土地であるのだ。

バッサーニオは、ポーシアを贈られると同時に、ポーシアから、指輪と家の権利を贈られる。

Myself, and what is mine, to you and yours
 Is now converted. But now I was the lord
 Of this fair mansion, master of my servants,
 Queen o'er myself; and even now, but now,
 This house, these servants, and this same myself
 Are yours—my lord's!—I give them with this ring. . . .

(3 . 2 . 166—71)

たしかにポーシアは交換される女性として、男性社会の絆を強める役割を果たしている。しかしポーシアは交換されるものであると同時に、領地を贈ること
 で贈り手という主体にもなり、パートナーとしての妻となる。女性が単なる交

交換物ではなく、自身贈り手として男性との絆を作る。それは、男性社会の絆を再構成することになる。つまりポーシア、バッサーニオの絆と、バッサーニオ、アントーニオの絆との間に緊張が生じる結果になる。この緊張はさらに指輪の挿話で発展させられ、ポーシアが男性より優位に立つ存在になりかねない状況が生まれるのである。⁽⁸⁾

ではこの三者の関係はどのようなになるのだろうか。まずアントーニオとバッサーニオの間に既に作られている関係から見ていくことにする。

アントーニオは贈与する人であり、バッサーニオは贈与される人である。ただし、両者の互酬性は釣り合いが取れていない。従って贈与の互酬性の原則からいって、バッサーニオがアントーニオに何時か返礼をしなければならない状況にある。

返礼をする機会は、アントーニオが窮地に陥ったときに訪れる。バッサーニオはポーシアと共に、初めはシャイロックにアントーニオの借金を返済することを申し出る。それはアントーニオとの間に間接的な贈与関係を作りうる。しかしこの贈与は、シャイロックの拒否にあって、成り立たない。バッサーニオが最後に自らを投げ出すとき、初めて自らの肉を贈ったアントーニオと、自らの命を贈り返したバッサーニオの贈与の互酬性は釣り合いが取れるのである。

バッサーニオは、しかし、ポーシアとも贈与で結ばれている。彼がいとも簡単に、自分も妻も失ってもよいと述べる時、三者間に存在している緊張は、当座の裁判の問題以上であることを予感させる。

バッサーニオが自らを投げ出すのに対して、アントーニオも自分の死で負債を帳消しにするという。しかしそうすると、バッサーニオはアントーニオに二重の負債を負ったままそれを永久に返せなくなる。裁判の場面について、トヴェイ (Barbara Tovey) は、アントーニオの態度が利己主義的で、みせかけの犠牲精神に過ぎないという。シャープ (Ronald A. Sharp) は、トヴェイはアガペ (agape) とフィリア (philia) を取り違えているとして、アントーニオの行為はフィリア (友愛) であり、利己主義的であると同時に、自己犠牲的であると述べる。⁽⁹⁾ 贈与に返礼は付物であるが、贈り手はそれを強要しない。かといって、贈り手は返礼があることを知らないわけではない。アントーニオにみ

られるのは、このような贈り手の持つ利己主義的かつ自己犠牲的な側面である。

バッサーニオが自らの命も妻も捧げるというのも、自己犠牲的かつ利己主義的であり、裁判の主たる交易の論理と対照的に、贈与の論理がこの二人の間を支配しているといえる。男装したポーシアの前で、男性同士の結び付きが、贈与の論理でますます強まっていく。

この関係を解体し、再構築するのは、指輪のつくる贈与の輪である。指輪は三者の間を循環し、贈与される。ポーシアから贈られた指輪は、アントーニオの頼みによって、バッサーニオから男装したポーシアに贈られ、さらにアントーニオを介して、バッサーニオに再び贈られる。三者がこれによって贈与の輪の中に組み込まれるのは間違いない。しかし、三者が同じレベルで贈与によって結びつくわけではない。指輪の持つ象徴性は、アントーニオを否応なく、ポーシアをバッサーニオに贈る父親の役に嵌めてしまう。ポーシアは自らを贈り手であると同時に贈られるものともすることで、父親の遺志通りに贈与されねばならなかった以前と逆に、彼女の意思通りに贈与させられてしまう父親を作り出し、自らを父親から、バッサーニオをアントーニオから解放するのである。

ポーシアがアントーニオに贈るのは指輪だけではない。アントーニオは劇の最後にポーシアから、船が無事であったという手紙を受け取る。これも一種の贈り物と見做すことができる。この手紙は、アントーニオに商人という役を思い出させる。ポーシアの贈り物によって、アントーニオは、友人から父親、そして商人となり、ポーシアとバッサーニオという夫婦の絆、指輪の輪から排除されていく。代わって、グラシアーノとネリッサがその輪にはいる。⁽¹⁰⁾

つまり、この劇における贈与の作る人間関係が、最終的に目指しているものは、ナルシズム的で不毛な友情よりも、他者を愛して子孫繁栄に繋がる結婚である。贈与には常に家系、子孫の問題が絡んでいるのだ。

既に述べたように、箱選びに失敗したものは妻を得られず、家系が続かない。ポーシアとアントーニオの価値を区別するのも、この家系を続かせることに貢献できるかどうかというところにある。アントーニオは、アリストテレス (Aristotle) に由来する考え方を踏まえて利子に反対する。⁽¹¹⁾

If thou wilt lend this money, lend it not
 As to thy friends, for when did friendship take
 A breed for barren metal of his friend ?

(1. 3. 132-34)

アントーニオが利子と子供を同じ比喩で捉え、さらに利子を取るような行為は敵に対して行なえと言うのは、この劇におけるアントーニオの位置を示すのに極めて適切である。しかるに金貸しが、人間的絆を持たない他者、外部の者との間に成立するのと同様に、ポーシアとの婚姻も女性という他者、しかもヴェニス社会の外部の世界との接触によって成立する。アントーニオはバッサーニオの求婚に協力はするものの、それが二人の関係を危うくすることに感づいている。外部の人間との婚姻は、共同体内部での婚姻と違い、共同体を崩壊させる。それは婚姻が交易と違い、人間関係を作る贈与的性格があるからだ。さらに婚姻は、なにも産み出さない友情と違い、子供という利子を産む。それゆえアントーニオは無意識的に、比喩とはいえ利子という子供を作ることに否定の見解を示すのである。

ポーシアの側からは、このような友情はどう見られているのだろうか。バッサーニオの箱選びの場面で、「目で生まれた恋は生まれた場所で死んで行く」という歌が舞台上で歌われる(3. 2. 63-72)。一義的には外見に惑わされるなということにもとれるし、不毛なナルシズム的なアントーニオとバッサーニオの間の絆を指しているともとれる。マッケアリ(W. Thomas MacCary)は、シェイクスピアの喜劇の男性主人公の精神的变化について、その第一段階はナルシズムであり、男性同士の繋がりであると述べている。⁽¹²⁾ 畢竟バッサーニオにとって箱選びの歌は、ナルシズム的な恋を脱せよという教育の歌である。

だが、鉛の箱を選ぶ際に、バッサーニオは外見が中身を欺くことは述べているが、この歌の持つ意味は理解していない。指輪を渡す際にも、ポーシアは婚姻の社会的な意味を強調するため、バッサーニオがこの家の主であることを述べる。バッサーニオは、ポーシアを得たと同時に、その家の所有者として家に

帰属することを認識する必要がある。さらにポーシアは、自分のためでなく、バッサーニオのためなら、万倍も豊か (rich) になりたいという、他者のために豊かになるナルシズム的でない態度を示している (3. 2. 150-57)。そしてこの豊かさの中には、子供を産むという意味が読み取れる。しかしバッサーニオは、ポーシアの渡す指輪が個人的な愛の証であると同時に、婚姻とそれに伴う社会的責任を含んだ、家としての女性の象徴であることを理解せずに指輪を手放すのである。

家系の主題は脇役の登場人物にも現われている。ポーシアの家とシャイロックの家は、その類似性によって、より対照的になっている。ポーシアの家の指輪は循環して元に戻る。それに対してシャイロックの家では、妻から贈られた指輪を、娘が猿と交換してしまう。シャイロックの家の指輪がどこかへ流れてしまうこと、それは娘と子孫保証の象徴としての指輪の贈与が途絶えてしまうことを意味している。ジェシカが“gentle”と呼ばれるところに、“gentile”との地口を読めば、ジェシカがユダヤ教徒の娘でない、つまり“cuckoldry”の仄めかしがシャイロックの家に対してなされていることになる。⁽¹³⁾ シャイロックは娘に裏切られる父親という点で、ポーシアの父親と対照され、妻からの指輪を失う点で、バッサーニオと対照される。シャイロックの家は、ポーシアの家に対する陰画となっているのだ。

ゴボー (Gobbo) 親子に関しても、息子の主人に贈り物を持ってきた父親が、頼みの杖 (staff) にしていた息子が死んだと思ひ込まされる (2. 2. 60-67)。杖の性的含意を考えれば、家系という問題と、去勢のモチーフの関連は明らかである。

贈与を巡るこのような状況の中で、アントーニオは『ソネット集』の詩人に近い考えを持っている。ソネット20番は、女性には快樂を、詩人には愛をと述べる。⁽¹⁴⁾

But since she [Nature] prick'd thee out for women's *pleasure*,

Mine be thy *love*, and thy love's *use* their treasure.

(20. 13-14, イタリアック筆者)

ベルモントにいるバッサーニオへの、死ぬ前に一目会いたいという手紙の中で、アントーニオは似た考え方を述べている。“Notwithstanding, use your pleasure; If your love do not persuade you to come, let not my letter.” (3. 2. 320-22, イタリアック筆者) アントーニオは、ポーシアとバッサーニオの間に存在するのは“pleasure”だとし、“love”は自分の側に引きつけている。“use your pleasure”に性的な含意を読み取ることも、アントーニオが愛と快楽を区別していることも、そして同時に、その点においては自分が役立たず (useless) であることに対する怖れを抱いていることも、これまで見てきたこの劇のコンテキストを考えれば、十分ありうることである。しかるにこの劇は、この友愛優位の社会を否定し、愛も快楽もその結果の子宝も女性の側に与えるという、結婚優位の社会が肯定されている。

男の浮気は許されるが、女の不貞は許されないというモラルが基盤ならば、指輪による男の愛の忠誠ということを強調する必要はない。しかし、この劇で“cuckoldry”という女の武器が強調されているのは、男の浮気を戒めるためであり、そのことは、結婚における家父長制と共に、互恵性つまり男女の相互依存によって理想の結婚が成立するという考え方を示しているといえる。⁽¹⁵⁾

女性は、贈与において交換されることによって、男性社会の絆を強くするというだけではなく、女性自身が贈与する主体となって、夫婦間の絆を作り、夫婦互恵的社会をつくる——これが『ヴェニスの商人』でシェイクスピアの提示している結婚観である。⁽¹⁶⁾

注

- (1) Shakespeare の作品からの引用はすべて、G. Blakemore Evans, ed., *The Riverside Shakespeare* (Boston: Houghton, 1974) に拠る。
- (2) Richard A. Levin, *Love and Society in Shakespearean Comedy: A Study of Dramatic Form and Content* (Newark: U of Delaware P, 1985) 30-31. これまでのアントーニオとシャイロックに関する批評の概観は、Laurie Lanzen Harris and Mark W. Scott, eds., *Shakespearean Criticism*, 10 vols. to date. (Detroit: Gale, 1984-) 4: 185-361を参照。
- (3) 贈与と交易の概念規定は、J. Van Baal, *Reciprocity and the Position of Women* (Assen /

- Amsterdam: Van Gorcum, 1975). J・ファン・バール、『互酬性と女性の地位』、田中真砂子、中川敏訳（弘文堂、1980）に基づく。特に、ファン・バール 50。
- (4) 贈与集団と交易集団が区別されることについては、例えば、トロブリアンド（Trobriand）諸島における、クラ（kura）交換の相手同士は、ギムワリ（gimwali）交易を行えない例などがある。ファン・バール 18。
- (5) 贈与が競争と敵対関係を生み出す例としてはポトラッチ（Potlatch）がある。M・モース、『社会学と人類学Ⅰ』、有地亨、伊藤昌司、山口俊夫訳（弘文堂、1973）227-28。古代ゲルマン社会において“gift”が「贈り物」と「毒」の二様の意味になりうることについては、モース 365、368。
- (6) Waddington によれば、『ヴェニス商人』においては、神慮を信じるかどうかで人物が分けられる。異教徒のシャイロックから見れば、アントーニオの商売は不合理なものに映る。Raymond B. Waddington, “Blind Gods: Fortune, Justice, and Cupid in *The Merchant of Venice*,” *ELH* 44 (1977): 458-61.
- (7) モロッコ王は運命を“random chance”とみる異教の考え方をしている。Waddington 458.
- (8) Karen Newman は、ポーシアが単に男性社会に組み込まれるのではなく、指輪の挿話で不義を連想させることにより、“unruly woman”にもなりうることを示唆している。Karen Newman, “Portia’s Ring: Unruly Women and Structures of Exchange in *The Merchant of Venice*,” *Shakespeare Quarterly* 38 (1987): 19-33.
- (9) Ronald A. Sharp, *Friendship and Literature: Spirit and Form* (Durham: Duke UP, 1986) 146-47.
- (10) この劇における指輪の重要性を考えれば、二種類の盲目的恋の観点からジェシカとロレンゾの恋を、ポーシアとバッサーニオの恋と対比して否定的に捉える Waddington の見方は、二人が父親の指輪を売り飛ばしてしまうことから支持できる。悪しき盲目的恋は、結婚の象徴である指輪を省みない。cf. Waddington 474-75.
- (11) M. M. Mahood, ed., *The Merchant of Venice*, by William Shakespeare (Cambridge: Cambridge UP, 1987) 76. ギリシア語で「利子」(tokos) は「子」を意味する。
- (12) W. Thomas MacCary, *Friends and Lovers: The Phenomenology of Desire in Shakespearean Comedy* (New York: Columbia UP, 1985) 5.
- (13) この劇における“cuckoldry”の意義については、Coppélia Kahn, “The Cuckoo’s Note: Male Friendship and Cuckoldry in *The Merchant of Venice*,” *Shakespeare’s “Rough Magic”: Renaissance Essays in Honor of C. L. Barber*, ed. Peter Erickson and Coppélia Kahn (Newark: U of Delaware P, 1985) 104-12を参照。

『ヴェニスの商人』における贈与の構造

- (14) ソネット20番と『ヴェニスの商人』の類似については、Tennenhouse も指摘している。Leonard Tennenhouse, "The Counterfeit Order of *The Merchant of Venice*," *Representing Shakespeare: New Psychoanalytic Essays*, ed. Murray M. Schwartz and Coppélia Kahn (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980) 62.
- (15) 家夫長制と互恵的社会については、Marianne L. Novy, *Love's Argument: Gender Relations in Shakespeare* (Chapel Hill: U of North Carolina P, 1984) 3-4 を参照。
- (16) "Kinship" 中心の社会から核家族中心社会への移行という観点から、この劇を見れば、パッサーニオの "Noblest kinsman" であるアントーニオに対して、ポーシアが妻と親戚のどちらが夫に対してより大きな権限を持っているのかをはっきりさせたとも読める。cf. Lawrence Stone, *The Family, Sex, and Marriage in England 1500-1800* (Harmondsworth: Penguin, 1979) 93-97.